

和歌の浦わ

土田龍太郎

神無月降りみ降らずみ定めなき時雨の空とみにも晴れやらねば、ながめやるわれさへしめりがちにて、ただつれづれとこもりゐて日を暮らすほかせむすべさらになし。よはひはや七十ぢに入りぬるわび人、來し方のなにくれそぞろに思ひ出でらるることに、恥ぢ悔まるることのみ多ければ、安きいも寝られず、昔を今にとりかへすものにもがなやと思ふともかひあらめやは。うたてもの狂ほしくいきどほろしきこいはむかたなし。

かかるをりは、よしや拙き一首なりとも讀み出でてはかなき水莖の跡にとどめなば、わづかにても心のうさを晴らさむたよりもやなりなむ。おのれ若かりしよりいささか親しみきたりし敷島の大和歌、道の奥にこそは分け入らざれ、歌數多からねども、をりをりに心に浮ぶよしなしごと三十一文字に口遊くまむこといつしかならひとなりたり。おほかたはさせるとりどころなき腰折れなれば、やがてうちやりてもやみぬべけれども、まれまれにはひとかど詠み出でたりとおぼゆることなかりしにもあらず。さる時はおのづからわれはがほになるままにひとりゑみさへせられぬれば、かたへの人の目にはいとをこがましくも見えにけむかし。さはいへど歌のよしあしいかにもあれ、老しぬる身の愁へをしばしだに慰むるよすがほかにありともおぼえねば、え及ぶかぎりこの敷島の道にいそしまではあるべからず。されば、かの玉津嶋に鎮まりませるなる衣通そとほのひめ姫の下したまはむさきはひをひたぶるに仰ぎこひのみまつりつつ、身がらばかりはなほここに留まるとも、わが魂はしもはるけくあくがれいでてかの紀の國和歌の浦わにさすらひありくらむかし。

わびぬれば和歌の浦わにもしほ草ただかきよせて日を送るかな

(平成二十九年十二月二十四日受附)